

仏縁にもよおされて

善光寺留学僧育英会
常任理事 佐藤俊明

仏縁

方丈さんがまだ若かりし頃、大本山総持寺で修行中、参禅指導を担当している時、一人の中年紳士が何回か臘八攝心や夏季攝心に参加していた。立川市在住の坂井司氏である。

この仏縁が三十五年後の今日、私たち二人をマレーシア訪問に導くことになったのである。

坂井氏ははじめ武蔵野の般若道場とか博多の聖福寺の門を叩き、臨濟禪に参じたのだが、機縁が熟さなかったため、曹洞禪に鞍替えし、よ

き師井上義衍老師に出会い、十年余その膝下で参禅弁道にはげんだ老練の居士である。

ニューヨーク港湾局在日貿易代表としての役職にあった坂井氏は、視野のひろい、そして海外に多くの知己を持つ国際人である。三年前に退職して自由の身になった坂井氏は、スリランカに工場を建てようとしている友人の協力要請に応じ、たびたびスリランカを訪れ、その途次マレーシアを通過したのであるが、坂井氏にとってこの国は、戦時中ビルマへの転属の際三カ月滞在了した想い出の地で特に愛着を持ってい

た。たまたまスリランカの比丘に紹介され、マレーシア仏教団体を訪れている中に、クアラルンプール郊外に仏教信者を対象とした瞑想センターを開いているリンガム氏に出会った。話し合ってみると、彼の並々ならぬ禅への関心と瞑想センターをひろく活用したいという熱烈な願望を知り、孤軍奮闘しているその姿に感動し、これはなんとか本腰をいれて協力してあげなくてはという気になり、リンガム氏また予期せぬ素晴らしい協力者の出現に無上の喜びを感じ、二人ともどもに相携えて禅風の挙場に精進しようということになった。そこで坂井氏は道場の一角に八畳間ほどの居室をつくり、日本とマレーシアの間を往還している。

まことに奇特な浄業を続ける坂井氏の、同行リンガム氏をひろく世に紹介してほしい、出来得れば留学僧も送ってほしいとの要請にもとづいて、今回の旅行が実現した次第。なお、留学

希望者については、リンガム氏は国際的視野に立っての活動を考えている禅宗僧侶で、英語の上達を望む人であればよろこんで迎え入れ、英語の指導にあたりたいという。リンガム氏にとって英語はほとんど母国語といえる。もち論センター滞在は食費を含めて無料とのこと。

リンガムさん

四月五日出発。成田空港第二ターミナルもマレーシア航空も私にとってはともに初利用の旅である。成田空港第二ターミナルはフランス人の設計になるものとか、まことに感じのいい建物で、チェックイン・カウンターと搭乗待合室の間をシャトルで結んでいる広々としたもの。ちよつと日本離れた感じがするが、飛行機に乗ってから、滑走路までジャンボ機の巨体を十分間も移動させるのだから燃料の消費も相当なものだろうと、余計なことながら考えさせられる。

さて、マレーシアの首都クアラルンプールはバンコクとほぼ同じ経度なので時差は二時間と
思っていたら実は一時間だけ、これまた不思議
なものの一つ。飛行時間は直行便で七時間二十
分なので、現地時間午後四時五十分、スバン国
際空港に到着した。クアラルンプールの中心か
ら西へ二二キロの地点にある空港である。

空港には坂井氏とリンガム氏夫妻が出迎えて
くれた。リンガム氏はよほど写真が好きとみえ
て、私どもの姿をとらえてはさかんにシャツタ
ーを切っている。そのカメラ、聞けば三十年前
に買ったものとかで、今日の日本ではお目にか
かることのできないオールド・カメラであるが、
それ以上に驚いたのは氏の愛車ボルボである。
日本ではポンコツとして誰一人かえたりみない
であろうほどの痛々しい古物である。私は『正
法眼蔵随聞記』の「学道の人は尤も貧なるべし」
という言葉を思い出し、リンガム氏が真実弃道

クアラルンプール市内



の士であることを感じ取った。

ホテルに着いて、坂井氏の通訳を介して、リシガム氏の心の遍歴を垣間見ることができた。

彼はインド系マレーシア人で、熱心なヒンドゥー教徒の家に生まれ、その感化を受けて子供のころはよくヒンドゥー教寺院をお参りする熱心な信者だった。それがカソリック系の中学校に入るに及んで、十五歳のころからカソリック教への熱烈な傾斜がはじまり、ほとんど毎日のように礼拝堂に通い、教会へは毎日曜欠かさずお参りし、手にはロザリオ（数珠）を持って常に祈りの言葉を口ずさんでいた。しかし卒業後は自分独りの信仰生活に沈潜するようになり、グループ活動との接触は次第に薄らいでいった。

一九五六年（マレーシア独立前）彼は英国政府からの奨学資金を得て渡英留学し、帰国後マ

レーシア政府に奉職した。この頃は特に宗教団体に加わらず、スポーツや社交関係に忙しく、結婚したのもこの時期である。（二一女をもうけ、彼女らはいずれも医師となって成長している。）

この時期、彼リシガム氏は経済的にも豊かだったが、社会の醜い競争や人間の飽くなき食欲さを見せつけられ、人生の歓びを失ない、深刻に悩むようになったが、彼の信ずる宗教は何等救いの手助けとはならなかった。

一九六六年、彼はさらに勉学を続けるため渡英留学した。ここで彼の宗教に対する関心が再燃した。そしてクアラルンプールに帰ってくる時、たまたま瞑想修行を続けている若い大学講師にめぐり会い、その影響で仏教関係の著作物をひろく漁ることになった。そしてクアラルンプールにおける上座部仏教の最大の寺院の住職とも知り会い、この人を手助けすることになり、世界各地へ送られるテープの作成、テキスト編

集への助力、ラジオ、マレーシアの仏教讃歌合唱プログラムの作成などに従事し、自らも日曜集会での法話、大学や他の寺院での法話もおこなうようになった。また仏教徒の特別修養会やセミナーなどに参加し、先輩僧侶に道をたずねたが、彼の真実探求の心を満たしてくれるものに出会うことがなかった。そこで彼は寺を去り、ヒンドウの先生のもとでヨガの修行をはじめ、またヒンドウ系のいろんな団体に加わり、勤務時間後それらの宗教団体のところで時間を過ごした。一九八一年にはマレーシアのギータ・ア・シユラム（ヒンドウ教典ギータの研究団体）の機関誌『神聖なる心に』に「ヨガを称えて」の一文を発表し、翌年の第六回国際ギータ会議では「心の再生と平和」についての論文を発表している。これと相前後して、国際精神学協会会長の要請によりヨガ教室をはじめた。そしてヒンドウ教やガンジーの教えを真

剣に学んだが、いずれも彼の心を満足させるものではなかった。

そこで彼はすべてを断念し、禅こそわが進む道と心にいきかせ、独自の道を歩む決意をし、坐禅修行を実践し得る場所の探索を開始した。そして三年の後、さいわいにもバトウアランに恰好の場所を見つけた。

彼は全財産を投げ出し、ジャングルを切り開き、整地をおこない、修行道場の建築に取り組んだ。そしてその道場を「メタ・ビラ」(Meta villa)と命名した。Metaはパーリ語で「友愛の心」、villaは英語で「別荘」の意。

「メタ・ビラ」が建造されると、多くの友人や僧侶など、メタ・ビラを利用する人々の来訪がはじまった。現在は在家の仏教信者団体の月例集会にも利用されている。しかしまだ施設の利用は充分とはいえない。リンガム氏は中国系マレーシア人、さらに意欲的にインド系マレー

シア人に対し、禪の紹介をもくろんでいる。それは彼の真理探究の過去の心の遍歴の結果、やむにやまれぬ誓願である。

彼はいまマレーシアの人びとに坐禪を紹介しようとして懸命の努力を捧げている。

メタ・ビラ

クアラルンプールは「ガーデン・シテイ」とも呼ばれているという。なるほど、熱帯樹のこゝんもり繁った、街全体が公園のような緑豊かな街である。これはこの国の豊かさのシンボルでもある。道路もよく整備され、四通八達している。郊外に出ると道路の両側は見事な椰子の植林で、かつてのゴム林を椰子林に切り替えたものだという。造成ゴムの生産可能な今日、天然ゴムの採集は手数がかかり収益が少ないのにくらべ、椰子は捨てる物がないといわれるほど生産性が高く、ゴムから椰子への切り替えが出来る

クアラルンプール市内



なかつたスリランカにくらべるとその差は一目瞭然だといわれる。

椰子の林を通り抜けて西北にクルマを走らせると約三十キロしてバトゥアラン (BATU ARANG) という町に着く。最近町に昇格したばかりという小さな町である。この町の小高い丘の上に木立に囲まれた一角に建っているのが



「メタ・ビラ」建物入口

「メタ・ビラ」である。訪問者がなければクルマの音ひとつしない閑静なところである。

建物は約四十坪ぐらいで、坐禅ホールの三方を、応接室、図書室、三つの居室、炊事場、二つのシャワー兼用トイレ、それに「東京コーナー」と称する坂井氏の居室が取り囲み、南面が全部窓になっている。敷地は約一千坪で、来訪の宿泊施設、四畳半ぐらいの「クテイー」と呼ばれる小さな建物が二棟、それに屋外坐禅場、語り合いの広場などがある。みんな手造りである。よくもここまで頑張ったものだと感心する。

「文庫と水道タンクを作りたいので少々ご援助願いたい」ということで、黒田理事長も快諾した。リンガム氏は早速「KURODA BUNKO」
「SATO TANK」と書いた木札を準備して来たので、私たちはそれぞれの設置場所にその木札を打ちつけてきた。また、大きな木になって大きな実がなるといふジャックフルーツを二人



坐禅ホール内部

記念植樹



別々のところに記念植樹して来た。

リンガム氏は、「妻もこのごろはよく坐禅します。娘たちも私の生き方を理解して禅に関心を示しています」と言うが、生活の資をして社会的地位のシンボルである役職を捨て、来年からは完全に無収入生活にはいるという。ここまで来るには母娘の大きな抵抗があったに違いない。しかし二人の娘もいまや医師として一人立ちしており、今後は心おきなくこの道に精進できることであろう。

昼食近くになると、二人のメンバーがやって来た。一人は町の医師、いま一人は工場経営者だった。私どものお昼の会食に招いたものだった。

この機会に何か質問ないか、という坂井氏の誘導によりいろんな質問が出て、それなりに答えたのだが、その答えがたいへんわかりやすい

ということ、このことが翌日のクアラランプールでの別のグループとの会食の時も出て、わかりやすいテキストを作ってほしい。こちらで英訳するからということになった。

マレーシアは回教国なので酒は飲まない。三日間滞在の間、現地の人と二度会食したがいずれも酒、ビールは出なかった。この話は酒の上と実現するである



緑陰で歓談

うし、そうなればこれは大きな成果となるであろう。

再 会

四月八日、マレーシアに別れを告げて、十二時四十五分スバン空港を離陸、バンコクに向かう。一時間の時差があるので、一時間四十五分間飛んで午後一時半ドン・ムアン空港に着陸する。

留学僧の落合師と、日本留学を希望しているプラ・シャーンシャイ・キッティワソンの二人が出迎えてくれた。東京に帰る搭乗日時の変更手続で意外に時間を費し、ホテルに着いたのは午後五時頃だったが小谷亀太郎氏は根気よく長い時間待っておってくださった。早速所要の連絡をしてワット・パクナムに向かう。

二月の理事会で、

大韓仏教曹溪宗靈鷲叢林通度寺方丈

落合師(左)とプラ・シャーンシャイ・キッティワソン師



尹月下 禪師

スリランカ大菩提會會長

ヒデイガレー・パナテッサ大僧正

タイ国ワット・パクナム住職

プラタムパンヤーボデー大僧正

のお三方を名譽顧問に推戴した。その決定に基き、去る二月、理事長は韓国に出向いて尹月下禪師に辞令を手交し、三月には来日されたスリランカのヒデイガレー・パナテッサ大僧正に辞令を渡したので、今回辞令を持参してタイに立寄った次第である。

プラタムパンヤーボデー大僧正はことのほかよるこび、今後の協力を約してくれた。

ついで病気の静養中の副住職の河北邦雄師、プラ・パワナ・コーソンテラ老師を見舞って帰った。

翌九日、落合師とキッテイ・ワンソン師の兩名がホテルに来訪。同師の日本留学希望につい

て意見交換、引続いて福田千城氏と会う。

福田氏は今から二十七年前、まだ上智大学の学生だった頃、伊達木氏（現神奈川新聞社論説委員）と二人連れで、春休みを利用して貨物船に乗ってバンコクに着いた。上陸してみると、待つてはるはずの友人の姿が見えない。埠頭に立つてても仕方がないのでバスに乗ることにした。別に行くあてもない旅なので、一番遠くまで行くバスにしよう、乗ったバスがトンブリ行きだった。降りたところがワット・パクナムの近くで、おばあさんが何やら話かけてくれる。『ついて来い』日本人がいる』といつてもらしいことがおぼろげにわかったのでそのおばあさんについて行くと、そこがワット・パクナムで、日本の坊さんが四人いた。その中に佐々木さんと黒田さん、それに石附さんと佐々井さんがいた。（注 佐々井秀嶺氏はインドに帰化し、イン

ド仏教徒の指導者として活躍している。」

「何しに来た」「別にあてがない」「じゃ、寺に泊まれ。タダで済むからそうしろ」ということになり、二人ともサマネンというお小僧さんになって毎朝托鉢の同伴をした。

朝は五時に起こされるし、遊びには出れないし、逃げ出そうと思っていたら黒田さんが、ワット・リヤブという寺に日本人納骨堂がある。その掃除をするからいつしよに来いという。

嫌々ながら行ってみると、日本人物故者の過去帳やお位牌がある。それを掃除せというので、仕方なしに掃除をしていると唐行きさんの位牌がいくつもある。身体を張って異国で頑張ったのかと思うと胸を締めつけられるような気になったことを今でもはつきり覚えている。これが黒田さんとの出会いで、二週間ほどして別れ、その後マレーシア、シンガポールをまわって日本に帰り、卒業後、佐々木さんに「海外で働き

たいが、どこか使ってくれる会社はないか」と手紙を出したが、折返し、「ない」という返事が来た。仕方なく国内にとどまることにして日通の入社試験を受けて合格した。そこでそのことを佐々木さんに報告したら、佐々木さんは小谷さんにそのことを話してくれた。すると小谷さんは「日通をやめても来る気があるなら使ってみよう」というので、日通入社一日にして退職、バンコクに来たのだという。

バンコクに来て二、三職種を変えたが十年前から外食産業をはじめ、精進努力の甲斐あって福田氏はいま二十の店舗を擁する「大同門レストラン」を経営している。私たちはシーロム街という日本でいえば銀座通りに相当する一等地、センドラル・デパートの地下一階にある第十八号店に招かれた。

大同門レストランの売上げは目下のところ業界第三位とのことだが、ここ二、三年の間に五



福田氏の事務所にて

十店舗オープン、そして株式上場を目指しており、上場までは業界第三位の実績を確保したいと意気込んでいる。

事務所と各店舗がオンラインで結ばれており、コンピュータ化は業界トップの座にあるとこのことで、上場の暁にはバンコクからパタヤ、チェンマイ、南タイへの主要道路に多目的なロード・サービスの店舗開設を目論み、夢をふくらませている。たのもしい限りである。

縁とはまことに不思議なものである。ホンのわずかに二週間、ワット・パクナムで出会った二人が、二十七年後の今日、片や世界中に留学僧を送る異色の寺院住職となってワット・パクナムを訪れ、片やバンコク屈指のレストラン経営者となって思い出の地に相会するとは。

思えば今回のクアラルンプールとバンコク訪問は二十年三十年も前の仏縁にもよおされたもので、仏縁の大切さを教えられる旅だった。